

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04952

研究課題名(和文) 体育系大学の教職課程に位置付けた障害者スポーツ指導者養成プログラムの開発

研究課題名(英文) What we focus on in particular is to produce teachers with the capability to also guide children with disabilities

研究代表者

渡邊 貴裕 (Takahiro, Watanabe)

順天堂大学・スポーツ健康科学部・先任准教授

研究者番号：00621731

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、障害児も含めて体育・スポーツ指導ができる教員や指導者を学校教育現場に輩出することである。大学教育においてパラスポーツ教育を学び、実践すること、それによって将来的に社会の様々な分野にインクルーシブ社会への志向を持った学生が進出していくことは重要であると考えた。そのため、私たちは学生教育として学内のカリキュラムにおいて、サッカー、バスケットボール、バレーボールなどの実技の授業の数コマに、パラスポーツを導入した。また、学内カリキュラム整備だけではなく、学生がパラスポーツの現場に積極的に出ていけるような仕組みの整備もすすめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保健体育科の教職課程を置く体育系大学は、特別支援教育に関する基礎知識をはじめ、インクルーシブ体育に関する理念や、障害者スポーツに関する理論及び実践についての授業を位置付け、学生に学修させ、学校教育現場や地域スポーツとの連携のもと実践的指導力を身につけさせ、卒業後に各種学校での保健体育科教員として障害者スポーツ推進のための担い手となれるように教育を行っていくことが重要である。日本の教育機関では、人々の多様性と多様性を考慮できる指導者、そのための大学カリキュラムが未成熟であることは否めない。しかしながらこうした取組を通して、共生社会の担い手となる人材を育むことは、高等教育機関の重要な役割である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to produce teachers with the capability to also guide children with disabilities. We are convinced that it is important for students to be able to advance into various fields with a mindset of working towards an inclusive society, which they develop by learning and practicing Parasports education in university education. For this reason, we are collaborating with faculty members to introduce parasports in practical classes teaching soccer; basketball; and volleyball and to include those in the school curriculum. In addition to developing the curriculum, we are also working on a system that will allow students to participate actively in parasports activities.

研究分野：特別支援教育

キーワード：体育系大学 教職課程 障害者スポーツ 指導者養成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 (共通)

1 . 研究開始当初の背景

(1) 我が国の障害者スポーツにおける課題

現在、パラリンピック等で活躍する障害者アスリートの多くは学齢期に小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校といった、普通学校に在籍している(ヤマハ発動機スポーツ振興財団,2015)。ところが、普通学校に在籍する障害児の場合、体育という教科において本来体験するはずの身体活動を体験できず、十分な学習保障がされていない場合が多い(安井,2015)。その意味では、保健体育科教員は、障害のある子とない子が同じ集団の中で行う体育(以下、インクルーシブ体育)を実践していく必要がある(草野,2007)。また、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視する」や、「卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする」という学校体育の目的(文部科学省,2008)を達成することはもちろんのこと、保健体育科教員は障害児にスポーツ参加のきっかけを与え、スポーツの資質・能力を見出し、アスリートとして育てていくためのキーパーソンといえる。

(2) 障害者スポーツ振興に向けた、体育系大学の役割

保健体育科の教職課程を置く体育系大学は、障害者アスリート選手発掘・育成・強化という課題を解決していくうえでも極めて重要な役割を担っている。単に保健体育科教員免許状を授与するために必要となる「教職に関する科目」や「教科に関する科目」を設置するだけでなく、教職課程の中に特別支援教育に関する基礎知識をはじめ、インクルーシブ体育に関する理念や、障害者スポーツに関する理論及び実践についての授業を位置付け、学生に学修させ、学校教育現場や地域スポーツとの連携のもと実践的指導力を身につけさせ、卒業後に各種学校での保健体育科教員として障害者スポーツ推進のための担い手となれるように教育を行っていくことが重要である。しかしながら、体育系大学の保健体育科教職課程に位置付けた障害者スポーツ指導者養成についての検討はこれまで行われていない。

2 . 研究の目的

本研究では、2020年東京パラリンピック競技大会及びその遺産(レガシー)を見据え、体育系大学の保健体育科教職課程に位置付けた障害者スポーツ指導者養成プログラムの開発と検証を行う。本研究を通して得られた知見をもとに、障害者スポーツの普及・競技力向上を担える専門的指導者を育成していく。

3 . 研究の方法

以下の方法により、本研究をすすめた。いずれの研究も、大学と学校教育現場(中学校、高等学校、特別支援学校)教員との連携・協力のもと、ワークショップ等を通して意見交換を行い、障害者スポーツ指導者養成プログラムの有効性について検証する。

(1) 学校現場におけるインクルーシブ体育及びパラリンピック競技種目の指導等に関する支援ニーズの検証

(2) 実技科目等における障害者スポーツ種目の導入と学生の学びや意識の変化等の検証

(3) 大学を拠点とした公開講座、指導者講習会等の開催、リカレント教育およびインターンシップを含めた指導者養成プログラムの有効性の検証

4. 研究成果

ここでは、結果の一部を抜粋しみていくこととする。

(1) 障害者スポーツ指導者養成に向けた学内体制整備

障害者スポーツ指導者養成に向けて、学部・大学院と一体となった障害者スポーツ指導者養成を展開した。インクルーシブ教育(体育)の実現を目指すために、すべての学生が障害理解、共生社会、インクルーシブ社会、パラリンピックといった事柄を学べる科目と学修内容の整備を図った(図1)。また、各実技科目への障害者スポーツ種目の導入も視野に、モデル授業の実施と効果検証を行った。さらに、授業で身に付けた知識を現場で応用すべく、学部・大学院ともに実際のスポーツ現場に赴いて実習を行う科目を設定し、学生に実践的指導力を身に付けさせていった。こうしたカリキュラムの整備をはじめ、障害者スポーツを支援するネットワークと組織づくりを行い、障害者スポーツ指導者養成に向けた学内の組織体制の充実を図った(図2)。

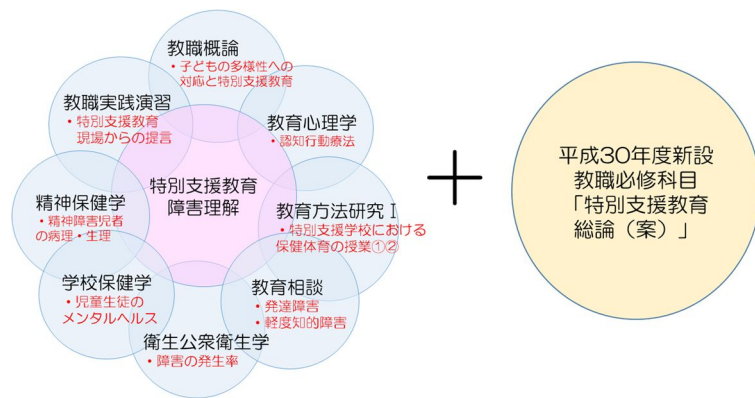


図1 障害理解のためのカリキュラム整備

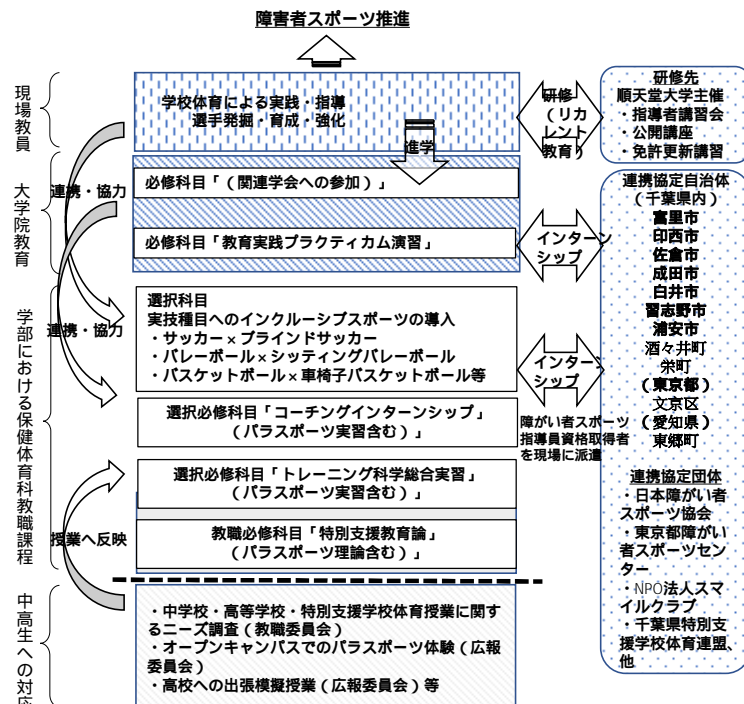


図2 障害者スポーツ指導者養成に向けた学内体制整備

(2) パラスポーツ教育プログラムの実践と効果の検証

本研究では、競技のみの体験会、あるいは上記の観点から「パラリンピック」「インクルーシブ社会」についての講義を含めた体験会に参加した児童生徒へのアンケート調査から、パラスポーツ教育プログラムの効果の検証を行った。2017年から2018年に行われたゴールボールやボッチャの体験会に参加した小学生へのアンケート(フェイスシート:5項目、パラリンピックについての知識:22項目3件法、障害者(スポーツ)観:11項目5件法、自由記述、N=324)を統計ソフトSPSS ver.24にて分析を行った。また、自由記述欄については、テキストマイニングソフトKH coder3で分析し、使われている語や語句同士の関係性を検討した。

アンケート結果

アンケート回答者は9歳から12歳までの小学生で男性が46.9%、女性が53.1%だった。事前に

何らかのパラスポーツを体験したことがあったのは、53.5%で、パラスポーツの観戦経験があったのは、64.9%に上った。

体験種目や、性別、事前の経験の有無、事前の観戦の有無などで、障害者や障害者スポーツへの捉え方について差があるかを対応のないt検定を行った。その結果、特にプログラムに変化を加えた2017年(実技のみ)と2018年(講義+実技)のゴールボールの体験会において「障害のある人の中には特殊な能力を持った人がいる」「障害のある人を理解することは難しい」「障害のある人の身体能力は障害のない人より劣っている」「障害のある人がスポーツを楽しむことは難しい」「障害者スポーツは見るスポーツとしては面白くない」「障害のない人のスポーツとくらべて障害者スポーツではそれほど技術は必要ない」の項目において5%水準で有意差が見られた。たとえば、「障害のある人を理解することは難しい」では、実技のみと講義+実技の群で有意に前者の得点が高い(障害がある人を理解することは難しいとは思わない)を選択していた($T(3.329)=179.592$ $p<.05$)。

自由記述欄

小学生の感想文では、障害や目が見えないことについて「怖い」「大変」「不便」「辛い」「難しい」などを記したものが、約46%を占めていた。障害については、あくまで個人の属性として障害を「大変なもの」「怖いもの」としてのみ理解するのにとどまっていることが明らかとなった。

アンケート結果や自由記述の分析からは、日本の小学生はパラリンピックや障害者スポーツへの認識が低いということがわかった。しかしながら、参加者は体験会の経験において、体験した競技やルールについての知識を得ており、子どもたちにこうした機会を提供していくことは意義があると言える。また、パラリンピック教育の視点に即して考えると、今後は競技のルールや知識だけではなく、競技を通してパラリンピック教育の構成要素を過不足なく学べるようにしていきたい。そのためには、実技の体験をもとに子どもたちが発展的に学べるようなプログラムの開発と継続した取り組みが必要である。

(3) 研究のまとめと今後の展望

本研究では、我が国の障害者スポーツ推進に向けた課題の一つである指導者養成に着目し、体育系大学の教職課程に位置付けた障害者スポーツ指導者養成プログラムの開発について、実践と研究を行った。上述のように学校教育現場では、2020年東京パラリンピックに向けてオリンピック・パラリンピック教育が行われ、子どもたちが障害者スポーツを知る機会が増えた。人々の障害者スポーツに対する関心を高めることは、我が国における障害者スポーツの振興という点でも重要である。しかしながら、こうした「パラリンピックムーブメント」の目的は、インクルーシブ社会を推進することである。単に障害者スポーツを学ぶだけではなく、障害の理解や共生社会への理解をいかに深めていくかが最も大切である。今後は指導者養成プログラム自体の効果検証について、受講学生等を対象としながら引き続き行っていく。また、パラスポーツ教育については、学校教育現場のみならず地域社会への積極的な展開をすすめ、共生社会の実現に向けた取り組みを行っていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡邊貴裕	4. 巻 40
2. 論文標題 日本における障害者スポーツ推進に向けた取り組み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 237 245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊貴裕・渡正・伊藤真紀	4. 巻 40
2. 論文標題 障害者スポーツの国際動向	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 246 251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Takahiro Watanabe
2. 発表標題 Leader training for health and adapted sports on the Faculty of Physical Education in Japan
3. 学会等名 The 2nd International Summit Forum on Exercise and Healthy China 2030 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takahiro,T・Maehana,H・Watari,t・Suzuki,K
2. 発表標題 Study of Para sports Instructor Training Program at University of Physical Education
3. 学会等名 23rd annual Congress of the European College of the Science (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊貴裕
2. 発表標題 順天堂大学におけるパラスポーツ推進に向けた指導者養成の取り組み
3. 学会等名 62回順天堂スポーツ医学研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊貴裕・鈴木宏哉・渡正・中丸信吾・永田悠祐
2. 発表標題 障害者スポーツにおける学・産・官・スポーツ団体と連携したモデル事業の取組
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木宏哉・渡正・前鼻啓史・永田悠祐・渡邊貴裕
2. 発表標題 パラスポーツ体験会のあり方に関する検討
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡正・前鼻啓史・鈴木宏哉・渡邊貴裕
2. 発表標題 パラリンピック教育概念の再検討
3. 学会等名 日本アダプテッド体育・スポーツ学会第23回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木宏哉・渡正・中丸信吾・渡邊貴裕
2. 発表標題 体育系大学が担う障害者スポーツの普及に関するモデル事業
3. 学会等名 平成30年度第2回千葉県体育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takahiro Watanabe
2. 発表標題 Actual Sports Instruction for Children with Mental Disability : Efforts Aimed at the Tokyo 2020 Paralympic Games
3. 学会等名 IASSIDD2017 (アジア・太平洋発達障害学会) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takahiro Watanabe, Gary D. Kinchin
2. 発表標題 Teacher training for health and physical education in Japan: Student teacher attitudes toward pupils with special needs
3. 学会等名 APPEC2017 (アジア太平洋体育学会) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊貴裕, 鈴木宏哉, 杉岡千宏, 杉浦采夏, 熊谷亮, 尾高邦生, 橋本創一
2. 発表標題 障害者スポーツに対する特別支援学校教員の関わり方と学校における生徒への取り組み
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊貴裕
2. 発表標題 保健体育科教職課程に位置付けた障害者スポーツ指導者養成の取り組み
3. 学会等名 日本体育学会第68回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前鼻啓史, 渡正, 鈴木宏哉, 渡邊貴裕
2. 発表標題 パラリンピック教育の概念と実践に関する予備的研究
3. 学会等名 障がい者スポーツ関係学会合同コンgres
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡 正 (Watari Tadashi) (30508289)	順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授 (32620)	
研究分担者	鈴木 宏哉 (Suzuki Koya) (60412376)	順天堂大学・スポーツ健康科学部・先任准教授 (32620)	